

慈覚大師円仁将来目録の研究

—『入唐新求聖教目録』の概要—

小 南 沙 月

序 言

後に天台宗第三世座主となる慈覚大師円仁（七九四—八六四）の九年三ヶ月に及ぶ入唐求法の成果を窺う上で不可欠な史料である将来目録三種、すなわち『日本国承和五年入唐求法目録』、『慈覚大師在唐送進録』、『入唐新求聖教目録』（以下『承和五年目録』、『在唐送進録』、『新求目録』と省略）のうち、前稿^{〔1〕}で『承和五年目録』及び『在唐送進録』を取り上げ、諸本の分析を行った。本稿では、総目録である『新求目録』を取り上げ、主に『大正新脩大藏経』（以下『大正藏経』と省略）に収録されている現存仏典を中心にその概要を紹介し、諸本の間に見られる文字の異同についても考察していく。その上で、円仁が揚州・五台山・長安などで求得の書目名より円仁入唐求法の目的やその成果を明らかにしていく手がかりとしていきたい。

一 『入唐新求聖教目録』の概要

1 長安求得

本節では『新求目録』に記載の順に従い、入唐求法の終着地である長安における求得を見ていく。以下、青蓮院本、高山寺本、叡山文庫池田藏本、『大正新脩大藏經』本、『大日本仏教全書』本を青本、高本、池田本、『大正藏經』本、『全書』本と省略して記載した。書目に振ったアラビア数字は、別稿に掲載した「入唐新求聖教目録」（以下「新求目録」と省略）と対応している。『承和五年目録』、『在唐送進録』の目録において見られた文字の異同と同様のものや、旧字体と常用字体、正字と異体字の相違などは本稿では省略した。また、本稿に記載の将来物の名称は、青蓮院本に依拠した上で常用字体に改めたが、青蓮院本に誤りがある箇所は他の現存諸本に依って改めた。なお、『大正藏經』本、『全書』本をまとめて称する場合に「活字本」とし、青蓮院本、高山寺本、池田本をまとめて称する場合に「写本」とした。以下、将来物の名称、『大正藏經』などに収録の巻数、頁数、番号を記載し、書物の概要を主に『仏書解説大辞典』、『大藏經全解説大事典』（以下『仏書』、『大藏』と省略）に依りながら紹介する。

2 『金剛頂経瑜伽文殊師利菩薩法』一品一卷 不空（『大正藏經』第二〇卷・一三五頁・No.一一七二） 金剛界軌五字文殊菩薩を念誦する方法を説く（『仏書』）。

3 『大威怒烏芻洪麼儀軌』一卷 不空訳（『大正』二一・七〇五・No.一二二五）『大威怒烏芻洪麼儀軌經』 胎金合軌の仏典で烏芻洪麼明王を本尊とする十八道立の念誦法などを説く（『仏書』）。

4 『仏為優填王説王法政論經』一卷 不空（『大正』一四・七九七・No.五二四） 仏が優填王のために王法を説く

- (『仏書』)。
- 5 『速疾立駿魔醯首羅天説迦楼羅阿尾奢法』一卷 不空三藏訳(『大正』二一・三二九・No.一二七七) 青本は「迦楼」の下の「羅」の字を欠く。魔醯首羅天が那羅延天に阿尾奢法を説く(『仏書』)。
- 6 『観自在菩薩如意輪瑜伽』一卷 不空三藏訳(『大正』二〇・二〇六・No.一〇八六) 『観自在菩薩如意輪念誦儀軌』(『大正』二〇・二〇三・No.一〇八五)の説明を補うものである(『仏書』)。
- 7 『金輪王仏頂要略念誦法』一卷 不空 通諸仏頂(『大正』一九・一八九・No.九四八) 大日金輪の法を修行する要略念誦の儀軌とされる(『仏書』)。
- 8 『金剛壽命陀羅尼念誦法』一卷 不空(『大正』二〇・五七五・No.一一三三) 金剛界軌の延命法に属し、『金剛頂経』(『大正』一八・一一〇七・No.八六五)の広本に依って記されている。毘盧遮那報身仏が須弥山頂金剛宝楼閣にて一切如来の求めに応じて金剛壽命陀羅尼、除災延命の護摩法の功德などを説く(『仏書』)。
- 9 『聖観自在菩薩心真言瑜伽観行儀軌』一卷 不空(『大正』二〇・四・No.一〇三一) 金胎合軌で聖観音法に属する。修行者が曼荼羅を作り、道場にて懺悔・三帰・三竟から始まり、捨身供養などを行ずる次第が記され、観自在菩薩の四字を如法に観ずる者への功德が説かれている(『仏書』)。
- 10 『金剛頂経多羅菩薩念誦法』一卷 不空(『大正』二〇・四五四・No.一一〇二) 多羅菩薩の念誦法が明らかにされている(『仏書』)。
- 11 『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』一卷 不空三藏訳(『大正』二二・四二・No.一二二一) 甘露軍荼利明王を本尊とする供養法を説く。後世の十八道(四度加行の最初に行われる行法) 修法次第の典型をなし、純密系統の主要な儀軌とされる(『仏書』、『大蔵』)。

- 12 『文殊師利菩薩根本大教王金翅鳥王品』 一卷 不空三藏訳 (『大正』二一・三二五・No.一二七六) 釈尊が淨居天にあつた時に文殊菩薩に対して説いた在家法である (『大蔵』)。
- 13 『不空羼索毗盧遮那仏大灌頂光真言』 一卷 不空 (『大正』一九・六〇六・No.一〇〇二) 光明真言及びその功德と念誦法を説く (『仏書』)。
- 14 『金剛頂超勝三界經説文殊五字真言勝相』 一卷 不空三藏訳 (『大正』二〇・七〇九・No.一一七二) 金剛界儀軌、菩薩部に属し、文殊の五字真言の功德を説く (『仏書』)。
- 15 『五字陀羅尼頌』 一卷 不空 (『大正』二〇・七二三・No.一一七四) 金剛界儀軌中の菩薩部に属する文殊五字法を明らかにしたものである (『仏書』)。
- 16 『大日經略撰念誦隨行法』 一卷 不空 又名五支略念誦要行法 一卷 (『大正』一八・一七六・No.八五七) 『大日經』 (『大正』一八・四五・No.八四八) に基づく胎藏法の念誦法や觀行を簡略に示した儀軌で、『大日經』の第七卷、供養次第法に準拠しながら、それを簡略化したものである。『五支略念誦要行法』とも称される (『大蔵』)。
- 17 『木槌經』 一卷 (『大正』一七・七二六・No.七八六、失訳『仏説木槌子經』) 王舎城の鷲峰山にて仏陀が木槌子の数珠を度し三宝の名を唱えることよって得られる功德などを説く。不空訳の説がある (『大蔵』)。
- 18 『大毗盧遮那成仏神變加持經略示七支念誦隨行法』 一卷 不空 (『大正』一八・一七四・No.八五六) 『大日經』に基づき胎藏法の念誦法や觀行を略示する儀軌である (『大蔵』)。
- 19 『金剛頂降三世大儀軌法王教中觀自在菩薩心真言一切如來蓮華大曼荼羅品』 一卷 (『大正』二〇・三〇・No.一〇四〇) 觀自在菩薩の曼荼羅、三摩地及び供養儀式などを説く (『仏書』)。
- 21 『金剛頂經觀自在王如來修行法』 一卷 不空 (『大正』一九・七二・No.九三二) 『金剛頂經』により金剛蓮花部達

- 摩法要を演べたもので、観自在王如来を本尊とし、供養・観想をする方法を説いた供養儀軌である（『大蔵』）。
- 22 『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』一卷 不空（『大正』三三一・五七二・No.一六六五）阿耨多羅三藐三菩提心（無上の悟りを求める心）の行相を行願・勝義・三摩地に分けて説明したものであり、この三摩地菩提心（真言行者の菩提心）が強調されている（『大蔵』）。
- 23 『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』一卷 不空（『大正』二〇・五二三・No.一一二二）金剛界毘盧舍那如来が他化自在天において説いた理趣会の十七尊についての念誦法が説かれている（『仏書』）。
- 24 『金剛頂瑜伽降三世成就極深密門』一卷 不空与遍智訳（『大正』二二・三九・No.二二〇九）降三世明王を本尊とする念誦儀軌を説く（『大蔵』）。
- 25 『仁王般若陀羅尼釈』一卷 不空（『大正』一九・五二二・No.九九六）『仁王護国般若波羅蜜多經』（『大正』八・八三四・No.二四六）巻下、奉持品所説の五大菩薩（金剛手・金剛利・金剛葉叉・金剛波羅蜜多）及び陀羅尼を注釈したものである（『大蔵』）。
- 26 『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』一卷 亦有別本不空（『大正』一八・二九九・No.八七三）高本、活字本はこの書目を欠く。金剛界の五部（仏、金、蓮、宝、羯）中蓮華部について五相成身の観法及び諸尊の念誦法が示されている（『仏書』）。本目録には他に同名の梵本真言二巻が見られる（『新求目録』134）。
- 28 『仏説一髻尊陀羅尼經』一卷 不空（『大正』二〇・四八四・No.一一一〇）観自在菩薩が一髻羅刹法を修法する者は果報を受けることを説き、七日作壇法や灌頂、護摩法などの儀則が説かれている（『大蔵』）。
- 30 『金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法經』一卷 不空（『大正』二〇・五二八・No.一一二三）『金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法』 金剛界儀軌中の金剛薩埵法で、この儀軌は『金剛頂勝初瑜伽經中略出大衆金剛薩埵念誦儀軌』（『大

- 正』二〇・五一三・No. 一一二〇A)と同様、五秘密瑜伽妙法が主に説かれている(『仏書』)。
- 31 『金剛頂瑜伽護摩儀軌』一卷 不空 更有別本一卷 阿目怯跋折羅きや訳(『大正』一八・九一六・No. 九〇八) 不空金剛の別名、「阿目怯跋折羅」訳を高本は「阿目跋羅説」と記す。大本の『金剛頂経』中より護摩法を略説した儀軌とされる(『大藏』)。
- 32 『陀羅尼門法部要目』一卷 不空(『大正』一八・八九八・No. 九〇三)『都部陀羅尼目』、『金剛頂経』、『大日経』、『瞿醯経』(別名『玉咽耶経』、『蕤咽耶経』、『大正』一八・七六〇・No. 八九七)、『蘇悉地羯羅経』(『大正』一八・六〇三・No. 八九三)、『底哩三昧経』(『大正』二一・七・No. 一二〇〇)、『蘇婆呼童子請問経』(『大正』一八・七三三・No. 八九五)などの諸部の中から必要事項を取り上げてまとめたものである(『大藏』)。
- 33 『大聖文殊師利菩薩讚仏法身礼』一卷 不空(『大正』二〇・九三六・No. 一一九五) 仏が王舎城の鷲峯山に住していた時に文殊菩薩が八不中道の徳を讃嘆したことを説き明かしたものである(『仏書』)。
- 34 『仁王般若念誦法経』一卷(『大正』一九・五一九・No. 九九五、不空訳) 高本、『大正』本は「不空」を補う。『大正藏経』によると不空訳と確定できる。『仁王護国般若波羅蜜多経』の修法を明かしたものとされる(『仏書』)。
- 35 『成就妙法蓮華経瑜伽観智儀軌』一卷 不空(『大正』一九・五九四・No. 一〇〇〇) 『大正藏経』には不空訳として収録されているが、大暦八年(七七三) 不空によって『大日経』や『金剛頂経』に基づき『妙法蓮華経』(『大正』九・一・No. 二六二)を儀軌化したものとされる(『大藏』)。
- 36 『金剛頂勝初瑜伽経中略出大楽金剛薩埵念誦儀軌』一卷 不空(『大正』二〇・五一三・No. 一一二〇) 金剛界儀軌中の金剛薩埵の儀軌であり、『大楽金剛薩埵修行儀軌』(『大正』二〇・五〇九・No. 一一一九)と同本である。金剛界五仏の印真言を始め、一百八名讃の功德などが説かれる(『仏書』)。

- 37 『大乗金剛不空真実三昧経般若波羅蜜多理趣釈』一卷 不空(『大正』一九・六〇七・No.一〇〇三) 本書は、『大乗金剛不空真実三摩耶経般若波羅蜜多理趣品』(『大正』八・七八四・No.二四三)の注釈である(『大蔵』)。
- 40 『金剛頂瑜伽千手千眼観自在菩薩修行儀軌経』一卷 不空(『大正』二〇・七二・No.一〇五六) 青本は「経」の字を欠く。不空訳ではなく、不空が『金剛頂経』によつて本経を作つたとされる。修行次第と四種成就法(息災・増益・敬愛・降伏)が説かれる(『大蔵』)。
- 41 『大方広仏華嚴経入法界品四十二字観門』一卷(『大正』一九・七〇七・No.一〇一九) 不空によつて『華嚴経』巻第七十六入法界品(『大正』九・三九五・No.〇二七八)の『四十二字観門』を別出して新たに訳されたものである(『仏書』)。
- 42 『大方広仏華嚴経入法界品頓証毗盧遮那法身字輪瑜伽儀軌』一卷 不空(『大正』一九・七〇九・No.一〇二〇) 字輪観の瑜伽行法を内容としている。不空訳とされるが、その成立年代は疑問が持たれている。『大方広仏華嚴経入法界品』のうち、四十二字の字門を字輪として観想する方法が説かれている(『大蔵』)。
- 43 『観自在菩薩如意輪念誦法儀軌』一卷 不空(『大正』二〇・二〇三・No.一〇八五)『観自在菩薩如意輪念誦法儀軌』四度加行の如意輪念誦法次第の原本であるとされる(『仏書』)。
- 44 『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌経』一卷 不空(『大正』一九・三〇四・No.九七二)『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』(「儀」を青本は「威」とするが誤りである。尊勝仏頂の供養儀軌作法などが説かれる(『大蔵』)。
- 47 『聖閻曼德迦威怒王立成大神験念誦法』一卷 不空(『大正』二一・七三・No.二二一四) 雑密に所属し、釈迦牟尼仏が浄居天宮にて閻曼德迦(大威徳明王)を本尊とする大威徳法の念誦儀軌を説く(『仏書』、『大蔵』)。
- 48 『金剛王菩薩秘密念誦儀軌』一卷 不空(『大正』二〇・五七〇・No.一一三二) 金剛界儀軌中の金剛薩埵法で、金

剛王菩薩（金剛薩埵）の秘密念誦法が明らかにされている（『仏書』）。

49 『無量寿如来修観行供養儀軌』 一卷 不空（『大正』一九・六七・No.九三〇）『無量寿如来観行供養儀軌』 無量寿如来（阿弥陀如来）の供養法を説いた儀軌であり、十八道念誦次第の典拠とされる（『大蔵』）。

52 『金剛頂経一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』 一卷 不空（『大正』一九・三二〇・No.九五七） 大日金輪の儀軌に属し、即身成仏の深旨が示されている（『仏書』）。

54 『仁王護国般若波羅蜜多経陀羅尼念誦儀軌』 一卷 不空（『大正』一九・五一三・No.九九四） 『仁王護国般若波羅蜜多経』の奉持品の語句の注釈と護国のために修される仁王経法の曼荼羅を建立するための儀軌や修法の次第を説いたものである（『大蔵』）。

55 『瑜伽蓮華部念誦法経』 一卷 不空（『大正』二〇・六・No.一〇三二）『瑜伽蓮華部念誦法』 蓮華部（胎蔵界曼荼羅の観音院・地藏院）の念誦の次第を述べている（『大蔵』）。

57 『一字頂輪王瑜伽経』 一卷 不空（『大正』一九・三一三・No.九五五）『一字頂輪王瑜伽観行儀軌』 安怛陀の秘法を成就する修行作法を明らかにしたものである（『仏書』）。

58 『一字頂輪王念誦儀軌』 一卷 不空（『大正』一九・三〇七・No.九五四） 『一字頂輪王経』の本旨を修行する順次法則を示した儀軌である（『仏書』）。

59 『大虚空蔵菩薩念誦法』 一卷 不空（『大正』二一・六〇三・No.一一四六） 虚空蔵菩薩の念誦法であり、この教法を修行することによって得られる、業障を除くなどの功德が説かれる（『大蔵』）。

60 『受菩提心戒儀』 一卷 不空（『大正』一八・九四〇・No.九一五） 真言密教の受法の弟子が菩提心戒を授かる際の戒儀の文である（『仏書』）。本目録に『最上乘教授戒懺悔文』の名で同名の書目が見られ、重複して持ち帰ったも

- のである(「新求目録」170)。
- 61 『略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門序』一卷 不空(『大正』一八・二八七・No.八七〇) 真言陀羅尼宗は一切如来の秘奥の教、自覚聖智、頓証の法門であり、四種身を証し、五智・三十七智を円満する教えであることなどが説かれて(『大蔵』)。
- 62 『般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧真実金剛菩薩等一十七聖大曼荼羅義述』一卷 阿目佉金剛述(『大正』一九・六一七・No.一〇〇四) 『般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧真実金剛薩埵菩薩等一十七聖大曼荼羅義述』 高本、『大正藏經』本以外は「經」の字を欠く。十七菩薩の功德が説かれ、理趣經曼荼羅の重要な根拠とされる(『仏書』・『大蔵』)。
- 63 『金剛頂經金剛界大道場毗盧舍那如来自受用身内証智眷属法身異名仏最上乘秘密三摩地礼懺文』一卷 不空(『大正』一八・三三五・No.八七八) 「界」を青本は「蜜」とするが誤りであろう。金剛界三十七尊に対して礼拝、懺悔する法を説く(『大蔵』)。
- 64 『文殊問經字母品第十四』一卷 不空(『大正』一四・五〇九・No.四六九) 梁の僧伽婆羅訳『文殊師利問經』(No.四六八)の字母品第十四の別訳であり、悉曇五十字門を示したものである(『仏書』)。
- 66 『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』一卷 不空(『大正』二〇・五三五・No.一二二五) 金剛薩埵五秘密法の本軌であり、五秘密曼荼羅を本尊として滅罪の目的のために修する法である(『仏書』)。
- 67 『十一面觀自在菩薩心密言儀軌經』三卷 不空(『大正』二〇・一三九・No.一〇六九) 十一面觀自在菩薩の真言の功德、修行儀軌、成就処、護摩儀軌が説かれる(『仏書』)。
- 68 『菩提場莊嚴陀羅尼經』一卷 不空(『大正』一九・六六八・No.一〇〇八) 菩提場莊嚴陀羅尼の功德を物語形式で

- 宣揚する（『大藏』）。本目録には『梵字菩提莊嚴陀羅尼』一卷も存在している（『新求目録』197）。
- 69 『一切如來心秘密全身舍利寶篋印陀羅尼經』一卷 不空（『大正』一九・七一〇・No. 一〇二二） 一切如來無量俱胝くわく心陀羅尼とその功德が説かれる（『大藏』）。
- 70 『八大菩薩曼荼羅經』一卷 不空（『大正』二〇・六七五・No. 一一六七） 世尊が八大曼荼羅の供養による功德を説く（『大藏』）。
- 72 『大吉祥天女十二名号經』一卷 不空（『大正』二二・二五二・No. 二二五二） 大吉祥天女の十二名号の功德を説く（『大藏』）。
- 74 『大乘縁生論』一卷 不空 鬱楞迦造（『大正』三二・四八六・No. 一六五三） 十二有支の解説と十二因縁による無自性空、斷・常を離れた中道などが説かれる（『大藏』）。
- 75 『大乗金剛薩埵修行成就儀軌』一卷 不空（『大正』二〇・五〇九・No. 一一一九） 『理趣經初段大乗不空金剛薩埵初集會品』の修行儀軌法を詳述したものとされる（『仏書』）。
- 76 『大藥叉女歡喜母并愛子成就法』一卷 不空（『大正』二二・二八六・No. 二二六〇） 池田本と活字本は「又」を「刃」とするが、『大正藏經』の記載から「又」と確定できる。大藥叉女歡喜の婦仏の因縁、歡喜母の陀羅尼とその功德、陀羅尼法が説かれる（『大藏』）。
- 77 『七俱智仏母所説准提陀羅尼經』一卷 不空（『大正』二〇・一八〇・No. 一〇七六） 『仏説七俱胝仏母准提大明陀羅尼經』（No. 一〇七五）と同本異訳であるが、本經では不空の考えが打ち出されており、相違が見られる（『大藏』）。
- 78 『七俱胝仏母准提陀羅尼念誦儀軌』一卷（『七俱胝仏母所説准提陀羅尼經』の内） 『仏説七俱胝仏母准提陀羅尼經』所収の儀軌で、十八道立ての次第となっている（『大藏』）。青本以外の諸本はこの書目を欠く。

- 79 『観自在大悲成就瑜伽蓮華部念誦法門』一卷 不空〔『大正』二〇・一・No.一〇三〇〕 金剛頂部に属し、密教の修習者のための必読条項が記されている（『仏書』）。
- 81 『大聖文殊師利菩薩仏刹功德莊嚴經』三卷 不空〔『大正』一一・九〇二・No.三一九〕 文殊師利菩薩の仏土の莊嚴功德を説いたものである（『仏書』）。
- 84 『仏説十力經』一卷 勿提々犀魚訳〔『大正』一七・七一五・No.七八〇〕 『十力經』 『全書』本は訳者名を「勿提ヒ魚」とするが誤りである。仏が諸比丘のために如来が十種大智力を具していることを説く（『大蔵』）。
- 85 『仏説迴向輪經』一卷 尸羅達摩訳〔『大正』一九・五七七・No.九九八〕 仏陀が金剛摩尼菩薩に対して菩薩律儀戒を受ける功德とその功德を菩提に廻向することなどが説かれる（『大蔵』）。
- 87 『般若波羅蜜多心經』一卷（『大正』八・八四・No.二五二） 『大般若經』などの諸般若經の根本思想である空觀やその功德を簡潔明瞭に説く（『仏書』）。
- 88 『出生無辺門陀羅尼經』一卷 不空〔『大正』一九・七〇二・No.一〇〇九〕 仏世尊によって諸菩薩等に陀羅尼法要が説かれ、四法を成就して得られる陀羅尼の功德も説かれる（『大蔵』）。
- 90 『大仏頂広聚陀羅尼經』五卷（『大正』一九・一五五・No.九四六、失訳） 密教の諸々の条件が雑多に収録された仏頂系の重要な儀軌の一つとされる（『大蔵』）。
- 91 『不動使者陀羅尼秘密法』一卷 金剛菩提訳〔『大正』二二・二三・No.二二〇二〕 訳者名を青本は「金剛菩薩」とする。『大正蔵經』によると金剛智訳であり、金剛智の梵名は「跋日羅菩提」（*vajra-bodhi*）であることから、金剛菩提が正しいであろう。不動明王を本尊とする不動法の儀軌が説かれる（『大蔵』）。
- 92 『修習般若波羅蜜菩薩觀行念誦儀軌』一卷 不空〔『大正』二〇・六一〇・No.一一五一〕 写本は「行」を脱してい

る。般若波羅蜜菩薩の念誦法を説く（『大藏』）。

93 『金剛手光明灌頂經最勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品』一卷 不空共遍智同訳（『大正』二一・一・No. 一九九） 不動明王を本尊とする不動法の儀軌を説く（『大藏』）。

94 『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』一卷 南天竺三藏金剛智訳（『大正』一八・二五三・No. 八六七） 『大正藏經』は上下の二巻を収録しており、そのうち一巻を将来したか。空海、恵運も一巻のみ将来している。世尊金剛界遍照如来が自性所成の眷属とともに三十七尊の心真言などを説く（『大藏』）。

95 『金剛頂経瑜伽修習毗盧舍那三摩地法』一卷 金剛智訳（『大正』一八・三三七・No. 八七六） 十八会ある金剛界毘盧遮那如来の三摩地を修習する法が説かれる（『仏書』）。

97 『金剛頂一切如来真实撰大乘現証大教王経』三巻 不空（『大正』一八・二〇七・No. 八六五） 大本『金剛頂経』の初会の經典の部分訳である（『大藏』）。本目録には、同名の書目が別に一卷存在している（『新求目録』187）。

100 『金剛恐怖集会方広軌儀観自在菩薩三世最勝心明王経』一卷 不空（『大正』二〇・九・No. 一〇三三） 高本以外の諸本は「軌儀」を「儀軌」とするが誤りである。観自在菩薩が仏の教旨を承けて弥陀を中心とする曼荼羅を建立し、除病災厄、福德成就の法を説き、全九品より成る（『仏書』、『大藏』）。これも本目録には他に同名の書目が存在している（『新求目録』121）。

102 『金剛頂瑜伽念珠経』一卷 不空（『大正』一七・七二七・No. 七八九） 毘盧遮那仏が金剛薩埵に念誦の功德を説かせ、金剛薩埵偈をもってその功德勝利を説く（『仏書』）。

103 『大楽金剛不空真実三摩耶経般若波羅蜜多理趣品』一卷 不空（『国訳密教』経軌部第四） 青本は「蜜」を「蜜蜜」とするが誤りである。

- 104 『金剛頂経瑜伽文殊師利菩薩法』一品一卷 不空（『大正』二〇・七〇五・No. 一一七一）文殊菩薩の五字陀羅尼（アラパチャナ）の念誦法とその字義、供養法やその功德などが説かれる（『大蔵』）。
- 105 『普賢菩薩行願讚』一卷 不空（『大正』一・八八〇・No. 二九七）『四十華嚴』（『大方広仏華嚴経』、『大正』一〇・六六一・No. 二九三）の第四十巻で普賢菩薩が説く部分を読誦のため別行したものである（『大蔵』）。
- 106 『百千頌大集経地藏菩薩請問法身讚』一卷 不空（『大正』一三・七九〇・No. 四一三）地藏菩薩の大悲摂化の功德を讚歎する（『仏書』）。
- 108 『阿唎多羅陀羅尼阿嚧力品』第十四 一卷 不空（『大正』二〇・二三三・No. 一〇三九）悉羅跋城ぎょくごどおんの給孤独園（祇園精舎）で、観自在菩薩が世尊の許しを得て行った説法すなわち造塔の功德などが説かれる（『大蔵』）。
- 109 『一字奇特仏頂経』三巻 不空（『大正』一九・二八五・No. 九五三）在家法であり、特に王族の修する一字奇特仏頂明王の法の威力が明らかにされている（『仏書』）。
- 111 『能浄一切眼疾病陀羅尼経』一卷 不空（『大正』二一・四九〇・No. 一三三四）仏が迦毘羅衛国において阿難に浄眼陀羅尼とその功德を説く（『仏書』）。
- 112 『除一切疾病陀羅尼経』一卷 不空（『大正』二一・四八九・No. 一三三三）仏が給孤独園において阿難に世間の一切の疾病を治す陀羅尼とその功德を説く（『大蔵』）。
- 113 『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼経』一卷（『大正』二一・四六四・No. 一三二三、不空訳）世尊が阿難に焰口餓鬼を救援する陀羅尼とその施食法を説く（『仏書』）。
- 114 『仏説三十五仏名礼懺文』一卷 不空（『大正』二一・四二二・No. 三三六）三十五仏への帰命を述べ、今生及び他の生涯でなした罪を懺悔するものである（『大蔵』）。

- 115 『訶利帝母真言法』一卷 不空（『大正』二一・二八九・No.一二六一）『訶利帝母真言經』 訶利帝藥叉女の真言とその形像の詳説、訶利帝母念誦法などがその内容である（『大藏』）。
- 116 『觀自在菩薩說普賢陀羅尼經』一卷 不空（『大正』二〇・一九・No.一〇三七） 雜密經、聖觀音法に属し、靈鷲山で世尊に許しを得た觀自在菩薩摩訶薩が普賢陀羅尼を説く（『大藏』）。
- 117 『毗沙門天王經』一品一卷 不空（『大正』二一・二二七・No.一二四四） 毘沙門天が仏前において心真言を説き、真言の念誦の念誦の功德などを説く（『大藏』）。
- 118 『雨宝陀羅尼經』一卷 不空（『大正』二〇・六六七・No.一六三三） 雨宝陀羅尼の因縁とその功德を説く（『仏書』）。
- 119 『穰麤梨童女經』一卷 不空（『大正』二一・二九二・No.一二六四）『觀自在菩薩化身襄瞿哩曳童女銷伏毒害陀羅尼經』 雜密部、常瞿利法に属し、世尊が穰麤梨童女より聞いた世間の一切の三種の毒を除く真言が説かれる（『仏書』・『大藏』）。
- 120 『菩提場所説一字頂輪王經』五卷 不空（『大正』一九・一九三・No.九五〇） 雜密に属し、仏頂系儀軌の中で最も形態の整ったものであり、五仏頂に通じて説かれている（『仏書』）。
- 122 『大威力烏枢瑟摩明王經』二卷 北天竺三藏阿質達霰訳（『大正』二一・一四二・No.一二二七） 金剛手菩薩が仏部・蓮華部・金剛部のうち金剛部における烏枢瑟摩法を説く（『大藏』）。
- 123 『穢跡金剛説神通大滿陀羅尼法術靈要門』一卷 沙門阿質達霰（『大正』二一・一五八・No.一二三八） 青本は「要」を「異」とするが誤りである。仏が大円滿陀羅尼神呪穢跡真言、諸々の呪詛法などを説く（『大藏』）。
- 125 『普遍智藏般若波羅蜜多心經』一卷 摩竭提国三藏法月訳（『大正』八・八四九・No.二五二） 玄奘訳『般若心經』

- の異本として重視され、序文と結末とを有し、大本の系統に属するとされる（『仏書』、『大蔵』）。青本、高本は訳者名を「三蔵法日」とする。『大唐求法巡礼行記』（以下『巡礼記』と省略）会昌二年（八四二）五月二十五日の条に、「五月十六日起首、於青龍寺天竺三蔵宝月所、重学『悉曇』、親口『受正音』とあり、長安青龍寺のインド僧三蔵法月（一八四二）より悉曇を重ねて学んだことが窺え、高本の「月」と確定できる。
- 128 『慈氏菩薩所説大乘縁生稻幹喻經』一卷 不空（『大正』一六・八一九・No七二〇） 諸本は「縁」を「經」とするが誤りであろう。慈氏菩薩が舍利弗に縁生の原理を稻の生長に譬えて説く（『仏書』）。
- 131 『仏説阿吒婆拘大元率將無辺神力随陀羅尼經』一卷（『大正』二一・一七八・No二二三七）『阿吒婆拘鬼神大将上仏陀羅尼神呪經』一卷 写本は「拘」を「物」とするが、『大正藏經』によると「拘」と確定できる。阿吒婆拘鬼神大将（太元帥明王）が苦惱する比丘に慈悲心を起こし、太元帥明王の三種の陀羅尼を説く（『大蔵』）。
- 132 『金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣』一卷（『大正』三九・八〇八・No一七九八）『金剛頂瑜伽中略出念誦經』の注疏であり、『金剛頂經』の末疏として重要視される（『仏書』）。
- 133 『撰大毗盧遮那成仏神變加持經入蓮華胎藏海会悲生曼荼羅広大念誦儀軌』三卷（輪婆迦羅（善無畏）訳『大正』十・八・六五・No八五〇）『大正藏經』は「軌」の下に「供養方便会」を補う。『大日經』系の供養儀軌で、胎藏法四部儀軌の一つである（『大蔵』）。
- 135 『大宝広博楼閣善住秘密陀羅尼經』三卷 不空（『大正』一九・六一九・No二〇〇五） 大摩尼広博楼閣善住秘密陀羅尼の威徳と功德などが説かれる（『大蔵』）。
- 136 『大雲輪請雨經』二卷 不空（『大正』一九・四八四・No九八九） 雜密に属し、仏が難陀塢波難陀竜王宮にて大比丘・菩薩・諸竜王に請雨法とその功德を説く（『大蔵』）。

- 137 『大雲經祈雨壇法』一卷（『大正』一九・四九二・No.九九〇）これも請雨法が説かれ、『大雲經』の説誦によって甘露の降ることが主張されている（『大藏』）。
- 138 『仏母大孔雀明王經』三卷 不空（『大正』一九・四一五・No.九八二） 釈尊が舍衛城のジェータ林にて阿難に大孔雀明王陀羅尼を授けた話を中心に、孔雀明王陀羅尼の功德を敷衍する内容である（『大藏』）。
- 139 『仏説金剛頂瑜伽中略出念誦法』六卷（『大正』一八・二三三・No.八六六）『大正藏經』によると唐開元十一年（七三三年）、金剛智の訳である。十万頌の『金剛頂經』から抄出され、日本の真言宗では灌頂の本拠として重視されている（『大藏』）。
- 141 『施諸餓鬼飲食及水法并手印』不空三蔵口決一卷（『大正』二一・四六六・No.一三一五） 施餓鬼法の本軌であり、普施一切餓鬼印真言、五如来の真言、三昧耶戒陀羅尼、發遣解脱真言とその功德などが説かれている（『仏書』、『大藏』）。
- 143 『転法輪菩薩摧魔怨敵法』一卷（『大正』二〇・六〇九・No.一一五〇） 摧魔怨菩薩が敵国の侵入や内乱から国王と国民を守護する摧魔怨敵の法を説く（『大藏』）。
- 144 『大聖妙吉祥菩薩秘密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法』一卷 淨智金剛訳（『大正』二〇・七八四・No.一一八四、菩提仙那訳） 最初に文殊菩薩の八字陀羅尼とその功德を説き、次に八字曼荼羅の造壇法と念誦儀軌が説かれる（『大藏』）。
- 148 『千転陀羅尼觀世音菩薩咒』一卷 智通法師訳（『大正』二〇・一七・No.一〇三五） 雑密の聖觀音法に属する。最初に千転呪を説き、次に千転印と觀世音心印を示し、成就壇法と焼火法とが明らかにされている（『仏書』）。
- 149 『聖閻曼德迦威怒王立成大神験念誦法』一卷 興善寺三蔵訳（『大正』二一・七三・No.一一二四） 雑密に属し、

- 釈迦牟尼仏が浄居天宮にて閻曼德迦（大威德明王）を本尊とする大威德法の念誦儀軌を説く（『仏書』、『大蔵』）。
- 150 『建立曼荼羅及揀擇地法』 一卷 慧琳集（『大正』 一八・九二六・No. 九一一） 『蘇婆呼童子請問經』、『蘇悉地羯羅經』、『玉咽耶經』、『大日經』などの諸經典より七日作壇法の択地法・造壇法などの記述を抄録したものである（『大蔵』）。
- 160 『大随求八印法』 一卷（『大正』 二〇・六四九・No. 一一五六A 『大随求即得大陀羅尼明王懺悔法』） 高本、『大正蔵經』本は「惟謹」を補う。『大正蔵經』には惟勤（一八三六）の名で収録されている。惟謹については、三千院本『慈覚大師伝』⁴に、「向_レ於街西浄影寺、奉_レ見_レ惟謹阿闍梨。各不_レ惜_レ玄秘_二而為_二指授_一」とあり、惟謹は円仁が秘法を受けた長安・浄影寺の僧侶であることが分かるが、『巡礼記』にその名は見られず、考察を要する。随求八印法を結び懺悔することによりあらゆる罪障が消除すると説き、さらにこの印を受持する功德が説かれる（『大蔵』）。
- 161 『金剛頂瑜伽三十七尊出生義』 一卷（『大正』 一八・九七・No. 八七二） 青本以外の諸本はこの書目を欠く。金剛界根本成身会の三十七尊出生の儀相が明らかにされ、最後に密教の付法相承が説かれる。不空訳とされるが、実際には別の人物による唐代の訳出とされる（『仏書』）。「新求目録」361にも惟謹述の将来物『阿字観門』がある。
- 163 『拔済苦難陀羅尼經』 一卷（『大正』 二一・九二二・No. 一三九五、玄奘訳） 池田本、『大正蔵經』本以外は「済」を「添」とするが誤りである。仏が給孤独園にて不動如来と滅悪趣王如来所説の陀羅尼とその功德を説く（『仏書』）。
- 164 『観自在菩薩心真言一印念誦法』 不空（『大正』 二〇・二二一・No. 一〇四一） 青本、『全書』本は「法」の字を欠く。金剛界の儀軌に属し、事供養を用いず、蓮華部心の印真言をもって修する聖観音供養法である（『仏書』）。
- 166 『大聖天歡喜双身毗那耶夜迦法』 一卷 不空（『大正』 二一・二九六・No. 一二六六） 雑密軌で聖天法の本軌であ

り、聖天の供養法と浴油法を説く（『大藏』）。

176 『大自在天法則儀軌』 一卷（『秘密儀軌集』二卷） 毘那夜迦天が鷄羅山において諸天衆、大梵天などに対して稽首作礼して呪法を説き、その法則を述べたものである（『仏書』）。

171 『大毗盧遮那成仏神變加持經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌』 二卷 法全（『大正』一八・一二七・No.八五二）『大毗盧遮那成仏神變加持經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會』三卷 青本以外の諸本はこの書目を欠く。『大日經』に基づく系統で胎藏法四部儀軌の一つとされる供養法である（『大藏』）。法全（一八四三）は『巡礼記』開成五年（八四〇）九月六日の条に、「玄法寺法全和尚深解三三都大法」とあり、玄法寺（長安左街安邑坊）の僧侶であり、海雲（一八三四）の『金胎両界師資相承』によると、惠果（七四六―八〇五）の法孫であることが分かる。会昌三年（八四三）二月二十九日には、「於玄法寺法全阿闍梨所、始受胎藏大法」とあり、円仁は法全より胎藏界大法を受法している。

173 『略叙伝大毗盧遮那成仏神變加持經大教相承伝法次第記』 二卷 沙門海雲集記『両部大法相承師資付法記』（『大正』五一・七八三・No.二〇八二）高本、『全書』本は「一卷」と記す。海雲による唐大和八年（八三四）の著作であり、インドから中国の金剛胎藏両部の師資相承、特に不空の系統について詳細に述べられている（『仏書』・『大藏』）。

175 『観自在菩薩心真言念誦法』 一卷 青本は「亦名一印法」を加える。先述の『観自在菩薩心真言一印念誦』（164）と同様の仏典であり、重複して将来したと思われる。

176 『諸仏境界撰真實經』 三卷 三藏般若訳（『大正』一八・二七〇・No.八六八） 大毘盧遮那如来が十六大菩薩などに囲まれ、須弥山頂の大宝楼閣にて金剛界三十七尊の印言、供養法、護摩を説く（『大藏』）。

- 177 『不空羼索神变真言経』二卷第六第七（菩提流支訳『大正』二〇・二二七・No. 一〇九二）『大正藏経』は三十巻七十八章となっており、円仁はそのうちの二巻を持ち帰ったのであろうか。不空羼索観音の真言陀羅尼、念誦法、曼荼羅、功德などを説き、密教經典としては浩瀚なものとされている。第六十八章では、光明真言が説かれることと知られる（『仏書』、『大蔵』）。
- 179 『慈氏菩薩略修念誦法』二卷（『大正』二〇・五九〇・No. 一一四一、善無畏訳）青本以外の諸本はこの書目を欠く。弥勒菩薩の念誦法を説く儀軌で、弥勒法の本軌である（『大蔵』）。
- 180 『毗那耶律藏経』一卷（『大正』一八・七七三・No. 八九八）『仏説毘那夜経』、唐代失訳）仏と執しやく金剛（金剛手菩薩）、観自在菩薩、梵天、堅牢地神との対話形式で、一般秘密修法の要件と作法が説かれている（『仏書』）。
- 181 『大菩提心随求陀羅尼一切仏心真言法』一卷 阿地瞿多訳（『秘密儀軌集』七）如来がその内証本誓を標幟する手印の法を示して大衆に真言を詳述したものである（『仏書』）。
- 182 『仏説無量寿仏化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法』一卷 金剛智訳（『大正』一一・一三〇・No. 一二三三）無量寿仏の化身である金剛童子の秘法を述べたもので、不空訳『聖迦柅に忿怒金剛童子菩薩成就儀軌経』三卷（『大正』二一・一〇二―一一八、No. 一二二二）を、修行形式の次第にまとめたものである（『仏書』）。
- 183 『大輪金剛修行悉地成就供養法』一卷（『大正』二一・一六六・No. 一二三一、失訳）一説に金剛智訳ともされる。『金剛頂経』によって大輪金剛法を説くが、この修法は大輪金剛の真言を唱えることにより全ての悉地を獲得するものであり、十八道立てになっている（『大蔵』）。
- 188 『金剛童子持念経』一卷（『大正』二一・一三三・No. 一二二四、失訳）金剛童子法すなわち金剛童子に供養する修法を説く（『大蔵』）。

- 192 『胎藏教法金剛名号』一卷 義操（『大正』一八・二〇三・No.八六四）『大正藏經』には二卷が収録されている。青本以外の諸本はこの書目を欠く。『大日經』の胎藏界と『金剛頂經』の金剛界の両部諸尊の名号を羅列したもので、全体で二二九尊の尊名が挙げられている（『大藏』）。
- 213 『梵語千字文』一本 義浄（『大正』五四・一一九〇・No.二二三三）青本は「字」を欠くが誤りであろう。青本以外の諸本はこの書目を欠く。漢字千語と対応する梵語とを対比したもので、梵字初学者のための書物である（『仏書』、『大藏』）。
- 283 『梵字持世陀羅尼』一本（『大正』二〇・六六二・No.一一六一、玄奘訳『持世陀羅尼經』）世尊が憍餉彌国の建磔迦林にて、貧困や疾病から離れる手段を問うた長者の妙月に持世陀羅尼を教示する内容である（『大藏』）。
- 336 『大慈大悲救苦觀世音自在王菩薩廣大円満無礙自在青頸大悲心真言一卷』（『大正』二〇・四九八・No.一一一三B）雜密に属する青頸法の仏典で、冒頭に梵字・音訳の順で陀羅尼を挙げて解説し、青頸大悲心印を挙げてゐる（『仏書』、『大藏』）。
- 337 『大随求陀羅尼經』二卷上下（『大正』二〇・六一六・No.一一五三『普遍光明清淨熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼經』）青本以外の諸本はこの書目を欠く。世尊が大随求陀羅尼などの陀羅尼とその聽問、受持誦誦、書写携帯の功德を説く（『大藏』）。同名の書目として、『普遍光明大随求陀羅尼經』二卷（『新求目錄』342）が見られる。
- 343 『阿密哩多軍荼利法』一卷（『大正』一一・四九・No.一二二二『西方陀羅尼藏中金剛族阿密哩多軍吒利法』）甘露軍荼利明王を本尊とする諸の成就法が主として説かれ、一卷二十二章より成る（『大藏』）。
- 346 『仏頂尊勝陀羅尼別法』一卷 龜茲国僧着那訳（『大正』一九・三九六・No.九七四F）『大正藏經』によると、訳

者名は「若那」とされる。若那が崇福寺僧普能のために口述したもので、画像法、造壇法、三十八種類の成就法が明らかにされている（『仏書』）。

350 『摩醯首羅天王法』一卷（『大正』二一・三三九・No.一二七九『摩醯首羅天王法要』）摩醯首羅天（大自在天）の鬚より伎芸天女が現れ、真言、画像法や印契、功德などを説く（『大蔵』）。

361 『阿字観門』一卷 沙門惟謹述（『大正』一八・一九三・No.八六三『大毘盧遮那経阿闍梨真實智品中阿闍梨住阿字観門』）『大日経』阿闍梨真實智品ほん第十六に説かれる阿字観門の実践と功德について、『大日経疏』（『大毘盧遮那経疏』、『大正』三九・五七九・No.一七九六）に基づき詳述している（『大蔵』）。

371 『大毗盧遮那成仏神変加持経』七卷無畏又有二卷（『大正』一八・一・No.八四八）本書は全体で七卷三十六章よりなる。教主大日如来が広大金剛法界宮を説法の座として、真言密教の諸の実践行などについて説く。善無畏口説、一行筆記によるもので、天台宗・真言宗において重んぜられる（『大蔵』）。

376 『梵網経盧舍那仏説菩薩心地戒品』一卷 極略本（『大正』二四・九九七・No.一四八四）『大正蔵経』には鳩摩羅什訳が二巻収録されている。大乘菩薩戒の根本經典である。教主盧舍那報身が、上巻において菩薩の階位、下巻で十重四十八軽戒相を細かに説明している（『大蔵』）。

377 『曹溪山第六祖惠能大師説見性頓教直了成仏決定無疑法宝記壇經』一卷 門人法海訳（『大正』四八・三三七・No.二〇〇八、法海集『南宗頓教最上大乘摩訶般若波羅蜜經六祖慧能大師於韶州大梵寺施法法宝壇經』）「門人法海」を高本、『大正蔵経』本は「沙門入法」とする。『大正蔵経』によると法海が正しい。六祖慧能（六三八―七一三）が韶州（現・広東省韶関市）大梵寺において行った説法を門人の法海が編集したもので、『大正蔵経』には現存最古の『六祖壇経』が収録されている（『大蔵』）。

- 379 『維摩經疏』一卷 豫洲刺史揚敬之撰 本書は鳩摩羅什訳『維摩經』（『大正』一四・五五二・No.四七五）の注釈であり、本書は多数存在する注疏のうちの一つである。撰者である豫洲（河南省汝南県）刺史揚敬之（一八三五—）は、『巡礼記』会昌五年（八四五）五月十五日の条に、「大理卿中散大夫賜紫金魚袋揚敬之、曾任_二御史中丞_一。令_二專使來問_一何日出城、取_二何路_一去、兼賜_二団茶_一」とあり、長安滞在中円仁との親交があった。『新唐書』卷一六〇に官僚としてその名が見え、『宋高僧伝』卷六、知玄伝によると、同じく長安にて円仁と親交があった僧侶知玄（八〇九？—八八二）から經典を学んでいたことが窺え、『維摩經』にも造詣があったものと見られる⁶。
- 380 『翻梵語』一卷（『大正』五四・九八一・No.二二三〇） 著者は梁代の宝唱である。七十三篇からなり、諸仏典から梵語音写語句を抜き出し、項目別に分類して略解した梵語字書である（『大蔵』）。
- 382 『華嚴經疏』二十卷（澄観撰、『大正』三五・五〇三・No.一七三五『大方広仏華嚴經疏』）澄観（七三八—八三九）が『大方広仏華嚴經』（『大正』一〇・一・No.二七九）を随文解釈したものである（『大蔵』）。
- 392 『安楽集』一卷 沙門道綽撰（『大正』四七・No.一九五八）『大正蔵經』によると二卷からなる。道綽（五六二—六四五）が自らの信仰を告白し、一代仏教を聖道門と浄土門に二分したもので、構成は十二大門三十八番の章節からなっている。末法時代において念仏の教えを宣揚しており、この聖浄二門判は、法然に引用され後世への影響が大きい書物である（『大蔵』）。
- 397 『浄土法事讃』二卷 善導和尚撰（『大正』四七・四二四・No.一九七九）高本は「土」を「王」とし、青本、高本は「導」を「道」とするが誤りである。上巻の卷名は『転経行道願往生浄土法事讃』、下巻は『安楽行道転経願生浄土法事讃』とある。『阿弥陀経』（No.三六六）を転経し散華供養して旋繞することにより、願生浄土を成就することを趣旨としている（『大蔵』）。

- 398 『百法論顕幽抄』十巻 沙門従方述（『中統藏経』一・八七・二『大乘百法明門論顕幽抄』） 本書は断片的に現存しており、『百法論』の注釈書として知られる中で最大のものである。『百法論』の注釈書というより、複註といふべきものとされる（『仏書』）。
- 399 『大乘百法明門論疏』一巻 沙門忠撰 「忠」を活字本は「義忠」とする。義忠は法相宗第二祖淄州大師慧沼（六五〇—六八二）の弟子で『百法』など諸経に通じていたことが知られる。（『仏書』三三二頁） 398の書物と類似の『百法論』の注釈書であろうか。
- 404 『因明入正理論疏』三巻 沙門基撰（『大正』四四・九二・No.一八四〇） 基（六三二—六八二）が勝羯羅主著『因明入正理論』（『大正』三三・一一・No.一六三〇）を注釈したものである。中国・日本における因明研究の祖典とされ、『因明大疏』ともいわれる（『大蔵』）。
- 406 『因明義断』一巻 沙門慧沼撰（『大正』四四・一四三・No.一八四二） 本書は慧沼（六五〇—七一四）によって著された他の因明学説批判の論である。因明説確立の書とされ、404の『因明入正理論疏』に次いで尊重される（『仏書』・『大蔵』）。
- 412 『因明正理門述記』一巻 下巻沙門勝莊述 池田本は「門」の下に「論」を加える。永超集『東域伝灯目録』（『大正』五五・一一四五・No.二二八三）の記載も同様であるが、こちらは勝莊述ではなく「神泰」とする。
- 415 『因明義心』一巻 本書は現存していないが、唐代の道献述とされ、蔵俊の『因明大疏抄』（『大正』六八・四三七・No.二二七二）に援引される（『仏書』）。
- 421 『宗四分比丘随門要行儀』一巻（『大正』八五・六五四・No.二七九一『宗四分比丘随門要略行儀』） 本書は敦煌出土本が現存している。六十巻からなり、『十誦律』（No.一四三五）、『五分律』（No.一四二二）、『摩訶僧祇律』（No.一

四二五)と並ぶ四大広律の一つで、インド小乗二十派中、曇無德部(法藏部)の『四分律』(『大正』二二・四六七・No.一四二八)に基づき、比丘の行儀の要略が示されている。比丘二五〇戒、比丘尼三四八戒を数えている(『仏書』、『大蔵』)。

422 『大般若波羅蜜經開題』一卷 本書は、『大般若波羅蜜經』六百卷(『大正』五・一・No.二二〇)の開題である。

427 『華嚴經法界觀門』一卷 京南山沙門杜順撰(『大正』四五・六八三・No.一八八四)『註華嚴法界觀門』 華嚴法界の観法が述べられ、一に真空觀、二に理事無礙觀、三に周徧含容觀の三重が記されている(『大蔵』)。

432 『南陽和尚問答雜微義』一卷 隆澄集 書名の「微」を青本は「微」とし、人名を高本は「劉澄」、活字本は「劉澄」とする。敦煌出土本(スタイン六五五七)の巻首に「唐山主簿隆澄」の序があり、標題は『南陽和尚問答雜微儀』とある。荷沢神会撰、『神會語録』の古型とされる(『禪学大辞典』)。

442 『微心行路難』一卷 「微」を青本は「微」とするが、本書は敦煌出土本(スタイン六〇四二)が存在しており、「微」と確定できる。定格聯章の歌曲の一種である(『禪学大辞典』)。

451 『百司拳要』一卷 この書目から477「白家詩集六卷」まで外典が並ぶ。以下、神田喜一郎氏の外典に関する考証によると、『新唐書』藝文志、史部職官類に「李吉甫元和百司拳要」とあり、唐憲宗朝の宰相李吉甫(七五八―八一四)によって唐代の官制を簡略に記述したものであるとされる。『唐会要』卷三十六では三十卷となっており、そのうちの一卷を将来したのであろう。青本には「進官了」とあり、帰国後朝廷に献上されたものかと思われる。

452 『兩京新記』三卷 『新唐書』藝文志、史部地理類に「韋述兩京新記五卷」とあり、撰者は唐の韋述(?―七七五)であり、五卷のうち三卷を将来したことが窺える。開元十年(七二二)に成立し、東西兩京すなわち長安城と洛陽城の地誌である。中国では明清時代に散逸したとされる⁸⁾。前田尊経閣に残巻として金沢文庫本が伝来している。円

仁が在唐生活において必要として購入したものであろう。これも青本には「進官了」とある。

454 『皇帝拜南郊儀注』一卷 神田氏の指摘にあるが、その題名から窺えるように長安にて皇帝が南郊を拜する際の儀式について記されたものであると思われる。

455 『丹鳳樓賦』一卷 神田氏は、丹鳳樓すなわち長安東内大明宮の正門の門樓を詠じた詩としている。

456 『曹溪禪師証道歌』一卷 貞覺述 高本、池田本、活字本は「真」を「眞」とするが、これについては未詳である。曹溪六祖大師慧能（六三八―七一三）に関する詩篇であると考えられる。

461 『利涉法師与韋瑛論』一卷 牧田諦亮氏の考証⁹によると、長安大安国寺の利涉（一六四五―）と進士韋瑛、道士葉静能をめぐる三教論争において、利涉が韋瑛を論破した際のものとしてされる。『宋高僧伝』卷十七、唐京兆大安国寺利涉伝によると、利涉はインドのバラモン階級出身で、護法の高僧として知られる¹⁰。

466 『京兆府百姓索隱微上表論釈教利害』一卷 「索」の上に池田本、活字本は「素」を加える。「隠」を『大正藏経』本は欠く。また、「微」を高本、『大正藏経』本は「徴」とする。この書目は他に見えず考察を要する。牧田氏の考証によると、中国社会における仏教の害を説いた書物であると見られる。

477 『白家詩集』六卷 神田氏の考証にある通り、白家すなわち白居易（七七二―八四六）の詩集であり、当時長安においても流行していたのであろう。

501 『青龍寺真和尚真影』一鋪 一幅彩色 高本、池田本、『大正藏経』本は「真」の上に「義」を補い「義真」とする。義真（七八一―八三三）は、『巡礼記』によると、長安青龍寺の東塔院に住していた僧侶である。開成四年（八三九）二月二十五日の条に、「相見真言請益円行法師、語云、（中略）於義真座主所、十五日受胎藏法」とあるのが初見であり、真言僧円行（七九九―八五二）も義真より胎藏界を受法している。円行の『靈巖寺和尚請

来法門道具目録」に「其大徳則惠果阿闍梨弟子同門義操和尚付法之弟子也」とあることから、惠果和尚（七四六一八〇五）の法孫であり、義操（一八二二）の弟子であることが分かる。円仁は長安滞在中の会昌元年（八四一）四月二十八日から三十日にかけて、胎藏・金剛両部曼荼羅の描画に際して義真の助力を得ており、五月三日の条には青龍寺の勅置本命灌頂道場にて「受_二灌頂_一抛_レ花、始受_二胎藏毗盧遮那經大法、兼蘇悉地大法_一」とあり、義真より胎藏界ならびに蘇悉地界大法を受けている。

502 「壇龕涅槃浄土」一合 504までの三点の壇龕について、牧田氏の考証によると枕本尊の類であり、涅槃浄土の様子が刻まれた檀木と見られる⁽¹⁾。

503 「壇龕西方浄土」一合 これも西方浄土の様子が刻まれた檀木であると考えられる。

504 「壇龕僧伽誌公萬廻三聖像」一合 三聖像すなわち泗州大師僧伽和尚（六二九―七一〇）と宝誌和尚（四二五―五一四）、萬廻和尚（六三二―七一）の姿を刻んだものであり、觀世音菩薩の応化として信仰されたと見られる。泗州（安徽省盱眙県）大聖僧伽和尚は十一面觀世音菩薩の応化身であり、淮水における水路安全の守り神として民間に信仰されていたと見られる。この僧伽和尚は、『巡礼記』開成五年（八四〇）三月七日の条に登州開元寺にて「寺仏殿西廊外僧伽和尚堂内北壁上、画_二西方浄土及補陀落浄土_一」とあり、僧伽和尚堂の壁に阿弥陀仏の西方浄土、觀音菩薩を中心とした補陀落浄土が描かれていることを記している。

2 五台山・揚州求得

次に、五台山求得の仏典のうち、現存するものを中心に見ていく。

515 『小止観』一卷 下巻 天台大師撰（『大正』四六・四六二・No.一九一五）『修習止観坐禅法要』（五三八―五九七）が俗兄の陳鍼のために坐禅止観実修の手引き書として著した書である。

518 『涅槃經玄義文句』一卷（『正統藏經』一・五六・二）二巻から成る。唐の道暹述とされ、隋の章安灌頂（五六一―六三二）の『涅槃經玄義』（No.一七六五）に簡潔な解釈を加えたものである（『仏書』）。

519 『六妙門文句』一卷 釈上宮疏 天台大師智顛によつて光大元年（五六七）―太建七年（五七五）の間に『六妙法門』（『大正』四六・五四九・No.一九一七）が著されているが、これは天台大師が南岳大師より伝えられた三種の止観（漸次止観・不定止観・円頓止観）のうち、不定止観について説いたものである。真人元開撰『唐大和上東征伝』（慧超記『遊方記抄』往五天竺国伝、『大正』五一・九九三a・No.二〇八九）によると、鑑真和上将来品の中に「天台止観法門、玄義文句各十巻、四教儀十二巻、次第禅門十一巻、行法華懺法一卷、小止観一卷、六妙門一卷」とあり、『六妙門』の日本への伝来は天平勝宝五年（七五三）の鑑真（六八八―七六三）によるものであり、青本記載の「釈上宮疏」はおそらく誤りであろう。

521 『勝鬘經疏義私抄』一卷 雜揚法雲寺明空述（『正統藏經』一・三四・四、『大日本仏教全書』四・『勝鬘經疏義私抄』） 青本は「私」を「和」とするが誤りである。高本は「尺上宮疏」を補う。推古十九年（六一一）に、聖徳太子によつて求那跋陀羅訳『勝鬘經』（『大正』一二・二二七・No.三三三）の注釈として『勝鬘經義疏』（『大正』五六・一・No.二一八五）が記されており、『勝鬘經疏義私抄』の序文によると、「其疏唐大曆七年、日本国僧使誠明得清等八人、兼三法華疏四巻、将_レ来揚州、与_三龍興寺大律師梨靈祐_二とあり、唐大曆七年（七七二）に誠明・得清らによつて揚州にもたらされたことが分かる。これについて唐僧明空がさらに注釈を加えたものが本書であろう。明空は、荊溪大師湛然（七一―七八二）の弟子とされる（『仏書』）が、湛然門人説は疑問視されている¹²。

528 『随意三昧』 一卷 臺山構波（『卍統藏經』二・三・四所収）「構波」を高本は「樺皮」、『全書』本は「搗皮」、『大正藏經』本は「搗皮」とするが不明である。本書は南岳大師慧思（五一五―五七七）の述作である。「随意三昧」とは、『摩訶止観』に説かれる四種三昧の一つである非行非坐三昧を指す。初心菩薩が六波羅蜜を修学する際禪定を根本とすべきであり、この禪を修するには行住坐臥の四威儀と食・語の威儀に禪定ならびに六度の行儀に工夫すべきことを述べている（『仏書』）。

530 『皇帝降誕日於麟德殿講大方広仏華嚴経玄義』 一卷（じよきよ 靜居撰、『大正』三六・一〇六四・No. 一七四三） 貞元八年（七九二年）、大安国寺の僧侶靜居が徳宗皇帝（七四二―八〇五）の降誕日に麟德殿にて八十卷『華嚴経』の綱要を進講するに際して、それを書き留めたものである。八十卷『華嚴経』の概要を知るための手引き書とされる（『仏書』、『大蔵』）。

532 『浄土五会念仏略法事儀讚』 一卷 南岳沙門法照述（『大正』四七・四七四・No. 一九八三） 本書は、広法事讚とされている法照撰『浄土五会念仏誦経観行儀』三卷（『大正』八五・一二四二・No. 二八二七）に対して、略式の五会念仏の行儀作法を記した書物であり、『五会法事讚』、『略法事讚』ともいわれる。序文と本文の二部に分かれ、序文で述作の意図が述べられ、本文では五会念仏の利益・由来・出典・実践法などが挙げられるとともに、三十七種の讚文が列記されている（『大蔵』）。法照禪師（一七六―一）は、『宋高僧伝』感通篇・唐五台山竹林寺法照伝、『広清凉伝』卷中・法照和尚入化竹林寺などにその名が見える。円仁が求法を行った五台山大聖竹林寺を創建した僧侶であり、大暦末年（七七九）あるいは貞元時代に長安章敬寺の浄土院にて五会念仏を修し、この頃に本書が著されたと見られている¹³。法照が創始した五会念仏は円仁によって日本にもたらされ、五会の音曲は天台声明の源流となり、またその念仏は比叡山の浄土教にも大きな影響を及ぼした。

535 『荆溪和上在仏隴無常遺旨』 一卷 「仏隴」を青本は「仙隴」とし、『全書』本は「山仏隴」とする。おそらく天台山の仏隴道場を指しており、高本、『大正藏経』本が正解であろう。

次に、揚州求得の一覧を見ていくが、書目の多くは「承和五年目録」（注1の拙稿・資料①）と重複しており、前稿で紹介した書目の内容については省略する。

582 『唐梵両字一切仏心中真言』 一本 高本は「中」の下に「心」を記しており、「承和五年目録」2の記載も同様である。

588 『唐梵対訳普賢行願讚』 一本 高本以外の諸本は「願」を「印」とするが、五大院安然の『諸阿闍梨真言密教部類総録』（通称『八家秘録』、『大正』五五・一一一三・No.二二七六）に空海、円仁、恵運の将来本を基に『普賢行願讚』と記されており、「願」と確定できる。

590 『唐梵両字大仏頂結護』 一本 『全書』本は「護」を「讚」とする。「承和五年目録」44の青本、『八家秘録』も「護」とする。明覚撰『悉曇要決』（『大正』八四・五〇一・No.二七〇六）にも「大仏頂結護」と見えることから、「讚」は誤りであると思われる。

611 『浄名経集解関中疏』 四巻 資聖寺道液集 長安資聖寺の「資」を高本、『大正藏経』本は「賢」とするが誤りである。

612 『浄名経関中疏釈微』 二巻 中条山沙門契甚述 「条」を高本、活字本は「修」とし、人名にも異同が見られる。「承和五年目録」66、「在唐送進録」52（注1の拙稿、資料②）の諸本も青本と同様であり、青本の記載で確定できるであろう。

613 『法華経銷文略疏』 三巻 天長寺釈延秀集解 「釈」を高本は「尺」とするが、「釈」は仏の戒を授けられた者の称

であり、青本の記載が正確であろう。

617 『肇論略出要義兼注附焉并序』 一卷 沙門靈興撰 青本は「序」を「辱」とするが、「承和五年目録」71も「序」としており、「辱」は「序」の誤りであろう。『肇論』 一卷（『大正』四五・一五〇・No.一八五八）の要点をまとめたものか。

626 『五方便念仏門』 一卷 智者大師作（『大正』四七・八一・No.一九六二、智顛撰）「作」を高本、『大正藏經』本は「述」とする。

629 『釈門自鏡録』 五卷 僧惠行集（『大正』五一・八〇二・No.二〇八三、懷信述『釈門自鏡録』）「釈」を青本、池田本、『全書』本は「尺」とする。僧侶惠行（高本、『大正藏經』本は「惠詳」）については未詳である。

636 『量処輕重義』 一卷 道宣（『大正』四五・八三九・No.一八九五、道宣緝『量処輕重儀』） 青本は「輕重」を「重輕」とするが、『大正藏經』によると「輕重」と確定できる。

653 『感通伝』 一卷 道宣（『大正』四五・八七四・No.一八九八『律相感通伝』） 唐乾封二年（六六七）に道宣（五九六―六六七）によって著された律に関する事などを天人との問答体によって記し、仏教文物に関する記述も見られる（『大蔵』）。道宣に関する書物は、本目録に『唐故終南山靈感寺大律師道宣行記』（668）・『大唐西明寺故大德道宣律師讚』 一卷（669）がある。

659 『集新旧齋文』 五卷 上都雲花寺詠字太「新」を『全書』本は「雜」とするが、「承和五年目録」（113）の諸本も青本と同様の記述である。「花」を高本、『大正藏經』本以外の諸本は「光」とする。智証大師円珍（八一四―八九一）の『福州温州台州求得経律論疏記外書等目録』（『大正』五五・一九二・No.二二七〇）、『日本比丘円珍入唐求法目録』（『大正』五五・一九七・No.二二七二）に『上都雲華寺十大弟子讚』が見えている。『長安志』卷九に

引用される『酉陽雜俎』によると、隋代に大慈寺と称していたが大暦初（七六六）に雲花寺と改められたとあり、「雲花寺」と確定できる。¹⁴⁾

701 「大聖僧伽和尚影」一張 苗 僧伽和尚信仰については504で触れたが、この真影は揚州においても信仰が行われていたことを伝えている。

702 「舍利五粒 菩薩舍利三粒辟支佛舍利二粒盛白蠅小合子并安置白石瓶子一口」 「蠅」を『大正藏經』本は「蠅」、池田本、『全書』本は「錯」とするが誤りである。

結 語

今回は、主に『大正新脩大藏經』（『大正藏經』）に収載の現存する仏典を中心に、『入唐新求聖教目録』に記載の書目についての概要を紹介した。『新求目録』によると、長安においては五・一・一のうちの大半は真言密教関係の經典、論疏、儀軌、戒儀、梵字などの典籍であることが知られた。これは、長安での円仁求法の大きな目的が伝教大師最澄（七六六―八二二）によって導入された天台密教（台密）の充実と確立にあったと考えられ、そのために胎藏界・金剛界・蘇悉地の三部の灌頂を長安の諸阿闍梨より受法している。例えば『巡礼記』によれば、開成五年（八四〇）十月二十九日には大興善寺にて元政より金剛界大法、会昌元年（八四二）五月三日には、青龍寺にて義真より胎藏毘盧舍那經大法と蘇悉地大法、会昌二年（八四二）二月二十九日には玄法寺法全より胎藏大法を受けている。この灌頂受法に際し、これら元政・義真・法全などの諸阿闍梨より目録記載の多数の密教典籍を授かり、求得したものであると考えられる。さらにまた、長安では密教典籍以外にも浄土、華嚴、禪、戒律をはじめ、因明や詩歌、地誌などの書や聖像・高僧真影・檀木なども将来している。このうち、浄土念仏については、道綽の『安樂集』一卷³⁹²⁾や、善導の『浄土法事

『華嚴法界觀門』一卷(47)などが見られる。また、因明に関しては、基(窺基)や慧沼、勝莊の論疏七点(404-415)があり、インド論理学である因明に関心が高かったことが知られる。さらに、大乘戒の根本聖典である『梵網經盧舍那仏説菩薩心地戒品』一卷(376)や『四分律』に関する行儀『宗四分比丘隨門要行儀』一卷(421)などもある。その他にも『白家詩集』六卷(477)などの漢詩や『兩京新記』三卷(452)などの歴史地理書もあり、円仁は幅広い関心を持って文献を蒐集したものと見られる。五台山求得の仏典では、南岳慧思の『隨自意三昧』一卷(528)や天台大師智顛の『小止観』一卷(515)をはじめ、天台関係の書が多数を占めている。これは、『巡礼記』の開成五年(八四〇)五月十七日の条に「実可レ謂_レ五臺山大花嚴寺是天台之流_レ也」とあり、大華嚴寺の法賢・文鑑・志遠・玄亮の諸大徳が、『法華経』を中心とする天台の教えや実践法門である『摩訶止観』を講じたり、法華三昧を修したりしていることを述べているから、天台典籍の多くはこの大華嚴寺で求め得たものであると推測される。さらに、五台山で注目すべきは、法照の『浄土五会念仏略法事儀讚』一卷(532)であり、本文中に紹介したように、円仁が比叡山に初めて伝承した天台声明(仏教音楽)や、叡山浄土教の源流をなす重要な典籍である。この五会念仏については、『巡礼記』の開成五年(八四〇)五月一日の条に竹林寺の般舟道場はんしゅうだうじょうにおいて、法照の念仏三昧のことを述べており、『略法事儀讚』求得の背景についてさらに詳細に検討していかねばならないであろう。また、円仁伝承のこの五会念仏が、比叡山のみならず、日本浄土教に及ぼした事項についても今後の課題として視野に入れておきたい。

最後に、揚州については唐梵兩字の真言(582)や讚(588)、『浄名経』(『維摩経』)の注釈(611)(612)や『法華経』の疏(613)、『肇論』の注書(617)などがあり、仏舍利(702)や和尚真影(701)なども見られる。天台関係では、智顛の『五方便念仏門』一卷(626)などが載せられている。

これら円仁将来物の入手背景及び入唐求法の成果、影響などについては次回に期したい。

〔追記〕 本稿は、一般財団法人仏教学術振興会・平成二六年度「SAT大蔵経データベース」学術研究部門研究助成の成果の一部である。

註

- (1) 拙稿「円仁将来目録の研究―『日本国承和五年目録』と『慈覚大師在唐送進録』の諸本の分析―」（『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要史学編』第一五号、二〇一六年）。
- (2) 拙稿「慈覚大師円仁『入唐新求聖教目録』」（『京都女子大学史学会』『史窓』第七四号、二〇一七年）。
- (3) 本稿では、『巡礼記』の原文を小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第一巻―第四巻（鈴木学術財団、一九六四年―一九六九年）に拠った。
- (4) 天台宗典編纂所編『続天台宗全書』史伝二（春秋社、一九八八年）五一頁。
- (5) 前田慧雲編『大日本統蔵経』第一輯第九十五套第五冊（蔵経書院、一九二二年）四九六―四九八頁。
- (6) 楊敬之については、前掲書（3）、第四巻（鈴木学術財団、一九六九年）一五〇頁に詳しい。
- (7) 神田喜一郎「慈覚大師外典考証」（福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年）九四頁。
- (8) 辛徳勇「唐長安城の基本的文献」（『都市文化研究』二二号、二〇〇三年）一七八頁。

- (9) 牧田諦亮「慈覚大師将来録より観たる唐仏教の一面」(福井康順編『慈覚大師研究』天台学会、一九六四年) 六九七―六九八頁。
- (10) 利涉法師については、牧田諦亮「唐長安大安国寺利涉について」(『東方学報』第三二冊、一九六一年) に詳しい。
- (11) 前掲論文(9)。
- (12) 武覚超『中国天台史』(叡山学院、一九八六年) 六六頁。
- (13) 前掲書(3)、第二卷(鈴木学術財団、一九六六年) 四三三頁。
- (14) 小野勝年『中国隋唐長安寺院史料集成』史料編(法蔵館、一九八九年) 一五三頁。